

パネル

との対比において注目されるとした。江田の発表に対しては、指導要領などの記述に、「根源主義」と「発展段階論」が存在しており、宗教現象の個性が容易に一般化され得ないことに注意を喚起すべきだとした。弓山の指摘した「地域スピリチュアリテイ」は、官製のそれが持っているナシヨナリズムを相対化するという意味で重要であるが、地域の特殊性の普遍化には警戒する必要があるとした。

以上の発表とコメントに対して、会場からは、宗教に係わる社会教育の中立性の問題、高齢者の看取りなどの福祉教育との係わり、さらには「地域スピリチュアリテイ」のもつ問題性の指摘などをめぐって、活発な意見が交わされた。

生命倫理の問題は宗教および宗教学に

何を問いかけるのか？

代表者・コメンテータ・司会 安藤泰至

キリスト教において生命倫理を語る可能性

土井健司

アメリカにおける生命倫理の誕生は一九七〇年前後であると言われるが、その前後しばらくキリスト教神学者の影響は大きいものであったし、また目立つものではないが、今日でも一定の影響力は認められる。生命倫理の問題がそもそもキリスト教にとって何であるのかという視点からするならば、キリスト教が復活、永遠の命をはじめとして「いのち」の問題を根本において説く以上、それはその本質に関わる問題であるはずである。歴史的には、とくにカトリック教会では善行の問題との関連ですでに十六世紀以来医療倫理が論じられてきた。

さらに、近年の学説では、ローマ帝国内で三世紀後半にキリスト教が飛躍的に拡大した理由は疫病の蔓延に対する看護であったという。一つには看護によってキリスト者の死亡率が減り、また死亡率の減少がある種「奇跡」として入信者数を増加させたからだと考えられる。エウセビオスの『教会史』に見られるように、そのさい死にゆく者、死者への世話はキリスト者に特徴的であった。この看護はキリスト教における愛の実践と

して認められる。またヨーロッパにおける「病院」というものの誕生は四世紀のキリスト教における施設にさかのぼる。有名なものはカイサリアのバシレイオスの建てた施設群である。このように看護を中心とした医療行為は、初期キリスト教が専心した事業の一つであった。そしてその事業の根本には隣人愛やフィランソロピア（人間愛）などのキリスト教特有の倫理思想が見出せるのである。

生命倫理の問題は、医学研究・医療の場において忘却されたのは誰かという視点を根本にもつ。人体実験においては実験結果に注意が傾くあまり、人間としての被験者を忘却したことが問題となった。また脳死・臓器移植は数多くの難病患者にとつて希望の医療であるとしても、それでもそこでは臓器提供者の治療やその死が忘却されているのではないだろうか。人工妊娠中絶の問題について、プロライフとプロチョイスいずれの見解においても、それぞれ忘却されている者はいないのか。ヒト胚研究の是非をめぐる議論のなかでは、ヒト胚という最小の「ヒト」が、研究という大義の下で忘却されようとしていたのではないか。そしてこうした問題の中でそもそも「人間」ということ自体が忘却されつつある。この忘却から救い出すことが生命倫理の課題だと考えるならば、キリスト教の愛、とくにフィランソロピアの思想は大切な視点であろう。

このようにキリスト教にとって生命倫理は何か根本的な問題であるはずであり、とくに宗教的な愛の視点からのアプローチが期待されるが、まだ十分といえる状況にはない。日本においても、歴史を顧みるならキリスト教倫理に裏打ちされた西洋医

学、具体的には宣教師であり医師である西洋人が日本の医療に果たした役割は大きいはずである。しかしそれが今日においても、キリスト教系の病院においてどこまで影響を保っているのかが問題であろう。この点を含めて、まずキリスト教の問題として、キリスト教的な視点から生命倫理の問題について語ることは緊急の課題だと言える。

さらにキリスト教を含め、宗教とはある種極端なところがある。右の頬を打たれたら左の頬をも差し出せという言葉に見られるように、宗教性、宗教的生というものはある種極端さの中に存立する。生命倫理の問題が忘却の問題であり、生の周縁にいる人びとへの忘却を回復するものであるとすれば、本来、宗教こそ生命倫理の問題を考えるべき課題を有しているのではないかと考える。

「宗教家」の生命倫理への取り組み

—— 仏教の立場から ——

佐藤 雅彦

現代的な問題を仏教に問いかけるとき、問われる「仏教」とは何か？ どの国のいつの時代の仏教なのか？ これらは、しばしば問題とされる。歴然としてある二千年前の仏陀そのものの教説、数百年以上経過した各宗派の開祖の教え、国や時代を越えてさまざまな仏教が存在する。本発表では、現代の日本